災害ボランティア活動を通して福祉や防災を学ぶ

―― 東日本大震災における避難所での支援活動より ――

阿　部　利　江

要旨： 未曽有の大震災と呼ばれた東日本大震災（2011 年 3 月 11 日）から 10 年が経つ。この間，被災した地域の復旧・復興・創生はどこまで進んだと言えるのだろうか。筆者は被災した地域に暮らし，復旧・復興の様子を目にし続けてきた。

本稿では東日本大震災での災害ボランティア活動に焦点を当て，ともに支援活動をおこなった学生の気づきや学びをまとめた。延 160 名の学生がある避難所で支援活動に取り組み，避難所生活を体験しながら，被災者の気持ちの変化を察し，子どもたちの発達にも触れている。学生は被災者との関係性を深め，気持ちを汲み取りながら必要とされる支援について悩み考えていた。長期的な支援の必要性も理解し，社会福祉の視点から「支援」を捉え，防災・減災の視点から「生活」を学ぶ機会につながった。

この避難所での支援活動は，災害ボランティアという立場ばかりでなく，被災者から「人生」を学ばせていただく学習者としての立場にも置かれ，福祉や防災を実践的な学問として考えられる時間や空間であったことがうかがえる。

キーワード：東日本大震災，災害ボランティア，福祉教育

は　じ　め　に

日本では古くからいくつもの自然災害に見舞われ，人々は被害に苦しみながらも困難を乗り越え，自然豊かな国土のなかで生活してきた。1961 年に施行された災害対策基本法では，国や都道府県，市町村等の組織・団体の他，国民がそれぞれの立場で防災に取り組むことを義務づけている。まさに，自助・共助・公助の観点から防災対策に取り組むことが期待されてきたといえる。近年は台風や豪雨による河川の氾濫，土砂災害などが多発し，日本各地に残る大きな爪痕やさまざまな教訓は，災害対策基本法の改訂を進める機ともいえるだろう。

ひとつ，2013 年 6 月の災害対策基本法改定において導入された「地区防災計画」の制度を例に挙げれば，自治体が主導する「地域防災計画」とともに，そこで暮らす人々が合意形成を図りながら自ら作成していく実践的な取り組みとして多いに期待されている。これは，防災と減災を一連の対策として捉え，暮らしの営みを発展させていくことにもつながる。過去に起きた自然災害等により，公助の限界を知りながら，自助・共助による防災への取り組みは一層，重視されていくことに違いない。

そして，第 3 回国連防災世界会議（2015 年 3 月）での『仙台防災枠組』の採択を挙げると，『兵庫行動枠組』の後継として国際的にも防災・減災の強化を図ることが求められている。今日，国

際的な防災指針とされる『仙台防災枠組』は，東日本大震災を経験した仙台の地から，これからの防災を発信することで期待されていることは多い。被災後も災害復興に防災を組み込むことや，マルチステークホルダーによる取り組みなどが骨子となっている。ステークホルダーの役割に，市民社会やボランティア，慈善組織，地域団体等の参加が位置づけられたことは画期的であり，いくつもの組織・団体が防災の取り組みに参加し，自然災害への備えを進めている。東日本大震災を経験した地であるからこそ，教訓を発信し続ける使命も課されているだろう。

I. 研　究　背　景

1）　東日本大震災と災害ボランティア活動

2011年3月11日，日本において観測史上最大規模と言われる地震が三陸沖太平洋を震源に発生し，津波や原発事故に伴う放射線災害も加わり，東北・関東の太平洋沿岸地域は甚大な被害を受けた。当時，未曽有の出来事は日本全体の国難と捉えられ，東日本大震災復興基本法（2011年6月24日）が施行された他，この法律に基づく「東日本大震災からの復興の基本方針」（東日本大震災復興対策本部2011年7月29日）も示されている[1)]。被災した県の復興計画や阪神・淡路大震災（1995年）を例に，東日本大震災からの復興を10年と定め，社会経済の再生及び生活の再建を目指してきたといえる。そして迎えた2021年3月，被災地の復旧・復興はどこまで進んだのか，科学的な観点から検証される機会が増えていくだろう。また，東日本大震災の記憶や教訓を後世へと伝えるための期待と課題が挙げられ，いくつもの組織・団体，メディアから発信されていく情報も増すことが予想される。

そのなかで，阪神・淡路大震災（1995年）以降，新潟県中越地震（2004年）などでも活躍し，今日ではあたりまえのように救援者の一人として位置付けられる災害ボランティアの存在に注目したい。

阪神・淡路大震災（1995年）は『ボランティア元年』とも称され，全国から多くのボランティアが駆けつけたことは有名な話である。新潟県中越地震（2004年）以降は，社会福祉協議会が災害ボランティアセンターを開設し，被災地の復旧・復興にボランティアの力が必要であることを広めてもきた。災害時のボランティア活動に焦点を当てた研究は増え続け，高校生や大学生の教育的な効果も明らかにされている。この東日本大震災においても，大学生による復興支援活動はいくつもの場所で行われ，たくさんの学生が被災地に心を寄せてきた。復興支援活動を通して，その後の人生に何らかの影響を及ぼした学生もいたことだろう。

例えば，早稲田大学が実施した0泊3日の復興支援活動の記録集を読むと，学生は赴いた場所が想像を絶する光景であったことや厳しい状況で生活をしている被災者がいたことなどの事実を知り，自分にできる支援を考えたという内容がまとめられている（2011年12月）。この記録集のなかで，加藤（2011：93）は，メディアから伝えられる現地の状況が必ずしも真実ではなく，

実際に見たことや体験したことを正確に伝えていくことも震災ボランティアの役割であるという内容を記述している[2)]。また，2011 年 8 月に 7 日間の日程で取り組んだ福島県でのボランティア活動を振り返り，茶屋道ら（2012：34）は，「現地の復興のプロセスを実際に観察しながら，そのプロセスの中で自分たちに何ができるのかを考えていき（考え続ける），それを実行し続ける事にこのボランティア活動の最大の意味があると考える」と述べている[3)]。そして，市川（2011：134）によれば，明治学院大学で取り組んだ支援活動後のミーティングにおいて，学生が互いに包摂し合う地域のあり方や人々の生き方を肌で感じ，自分の生き方や社会のあり方を考えたという発言があったという[4)]。市川（2011：135）は，この支援活動による大学生の学びに，共生社会の実現を目指した「教育目標」や地域社会と大学という複数の「学びの場」，答えが 1 つではない「学びのスタイル」，学びを深めるための「教員の役割」，非専門家による学びを積極的に位置づける「教育資源」などをキーワードとして挙げている[5)]。

東日本大震災以来，被災地では複合災害の事実と向き合い，多くの犠牲を払いながら復旧・復興の歩みを進めてきた。復興支援活動は，その体験ばかりで終わらせず，学生が人生の価値を学ぶ一つの機会につながることも考えられる。

2）　被災地で学ぶ福祉や防災学習

先述したとおり，災害ボランティア活動から学生が学ぶことは多い。そこで，あえて福祉の視点から災害ボランティア活動を考えれば，川上（2013：40）は，被災後の「生命・財産の維持」や「生活の安定・継続性支援」，「喪失への対応」を目標に掲げ，その乖離に生じる様々な問題に対応していくことが災害ソーシャルワークだと述べている[6)]。また，後藤（2018：120）は，佛教大学のボランティア活動の軌跡を追いながら，フェーズ（時間・時期）の意識や人としての尊厳と人権の尊重，アセスメントの重要性，日常の連続性，連携・協働の視点を災害時のソーシャルワークと引きつけて解説している[7)]。萬羽ら（2018：372）のインタビュー調査によれば，東日本大震災後における宮城県石巻市の生活支援の仕組みづくりとその展開を挙げ，主となる複数の機関や団体が支援体制を作り上げてきたことと，団体が緊急支援から復興支援へと形を変え，地域に根付いた支援を継続していることを整理している[8)]。被災地におけるニーズや支援の変容を見極め，災害時から平時へとつながる時間の流れで社会資源を開発・活用していくことに結び付けられるだろう。そして，和（2014：14）は，「高い専門性を持つ高等教育機関においてソーシャルワーカーとして養成されている学生が，被災地において継続的に支援できることは，被災地における各時期のニーズに対応した支援とソーシャルワーカーとしての成長に繋がる」と述べている[9)]。被災地で展開されるソーシャルワークが特別なものとは言い難く，理念や価値が変わらないことを踏まえ，知識と技術を向上させていく機会になることがわかる。

他方，遠藤（2017：2）は，学生にソーシャルワーカーの役割を質問したところ，「ボランティアコーディネート」と「こころのケア」という答えが返ってきたことに違和感を得て，教員が災

害とソーシャルワークの関係を伝えてこなかったのではないかと述べている[10)]。三浦ら（2012：28）は，被災地で支援に取り組んだ学生の記録から，教員が学生の気づきを学びにつなげられるよう，活動の振り返りと適切な指導が必要だとも述べている[11)]。被災地でソーシャルワークの展開を体験的に学ぶ機会は，学生の教育的効果が期待される一方，体験ばかりで終わらせることのない教育プログラムや指導プロセスの工夫が求められるに違いない。上野谷（2013）も，災害時のソーシャルワークの目的や方法は基本的に変わらないことを述べたうえで，ソーシャルワーカーの立場や役割を6つにまとめている（① ソーシャルワーカーは被災者の重層する痛みを理化し，共感して寄り添うこと，② 継続的な支援を地域で包括的に体系化すること，③ 想像力と創造性の発揮を繰り返すこと，④ 開発性，開拓性，交渉と調整機能を発揮すること，⑤ 被災者が主人公である考え方を理解されるよう，福祉教育やボランティア活動を再調整･支援すること，⑥ 被災者を直接支援している人々を支援し，スーパービジョン機能を発揮すること）[12)]。ソーシャルワークは，被災地の復旧・復興・創生とともに，地域生活の営みに途切れることのない支援を適切に続けていかなければならないということである。

次に，防災の視点も含めて災害ボランティア活動を考えれば，太田（2013：177）は，岩手県内の仮設住宅で学生とともに手がけた聞き書き活動を挙げ，「学生にだからこそ，長期的に期待されていることとして，今回のボランティア体験を一過性のものとするのではなく，体験からの学びを内在化させ，将来にその教訓を生かすという点がある」と述べている[13)]。平時から防災意識を高めることに加えて，防災・減災を目指した地域づくりのリーダーを担うことや，有事の際の復旧・復興へのリーダーシップを発揮してほしいという期待も向けられている。さらに，亜細亜大学が岩手県で取り組んだ災害ボランティア活動報告書を読めば，被災地で見聞きした事実から風化させてはいけない出来事を知り，自分に何ができるのかを模索し続けていく学生の思いがまとめられていた（2014年4月）[14)]。また，立教大学における交流プログラムの実践から，熊上（2015：35）は被災地のコミュニティ･エンパワメントになる可能性を述べている[15)]。加えて，「学生はこの活動で，被災地のコミュニティ形成に少しでも寄与することを通じて，社会問題を解決するコミュニティ・リーダーや政策立案者となるための視点や経験を実践的に得ることができると思われる」とも述べている（2015：37）[15)]。そして，長橋（2019：99）は，対人援助職としての防災教育プログラムの展開を試み，被災地で行った研修の成果に，「学生時代に学生防災リーダーで実際に現地へ行き，被災地の人々の生の声を聞くことによって，いつどこで起こるかわからない，災害も他人ごとではなく，備えることで人命を守ることを考えられる力が備わった」と教育効果を述べている[16)]。参加者が実際に被災していなくても，いつ遭遇するか予想困難な災害を自分ごととして考えられる手応えも感じている。山本（2018：34）が，コミュニティの形成を主な目的として組織化された「いわてGINGA-NETプロジェクト」の活動モデルが全国の大学に影響を与え，その後の地域福祉活動に大きな力を発揮していることを挙げるように，防災・減災活動へと発展していることもわかる[17)]。

被災地の光景は変化しているものの，この被災地で学生が学んだことは，これからの福祉や防災といった教育に結びつくものと捉えることができる。

3）筆者が活動拠点にした避難所（経緯と活動内容）

多くの学生が災害ボランティア活動を通して得られた学びは先述したが，筆者も学生たちと復興支援活動を行い，微力ながら被災地の復旧・復興に携わってきた一人である。

そこで，ある避難所の支援活動に至った経緯と取り組んだ内容を挙げていく。

筆者は，勤務校での緊急的な対応が落ち着き始めたころ，「東日本大震災最大の被災地」とも呼ばれたある街の災害ボランティアセンターを訪問し，メディアを通して被災状況を知ったボランティアが津波の影響を受けた建物の瓦礫を撤去するなど，復旧支援の要請に応える様子を目にした。この街は，約 16 万人（2010 年国勢調査）もの人々が生活し，全国有数の水産都市に挙げられていたが，リアス式海岸の複雑な地形であるが故に，予想を遥かに超える高さの津波が人々を襲い，約 3 千人もの生命が犠牲になっている。街には 179 ヶ所の避難所が開設され，避難者は 11 万人を越えていた。自宅を失った被災者も多く，1 日 1 日を耐え抜くしかない過酷な環境にあったことも事実である。

被災や避難状況，求められる支援などの情報を得るために，筆者は約 1 ヶ月間，複数の避難所を訪問して被災者や支援者から話を伺った他，既に支援活動を行っているボランティアの状況把握も進めた。そして，次第に被災地の破滅的な様子は変わらなくとも，少しずつ被災者の情緒の変化を感じ始めたころ，避難所では高齢者や子どもたちとの関わりが求められ，特に，日中の話し相手や入浴時の移動，学習や遊びを支援してほしいとの思いを伺った他，多くのボランティアが一定の期間で被災地に入るため，継続的に被災者と関係を築けるボランティアチームや団体が必要とされた。また，ある小学校教員から「1 日の生活に関わる第三者の存在が必要だ」という話を伺い，被災者に寄り添える継続的な支援の実施を計画することとした。そこには，発災直後から，日頃，実習している施設の状況を案じることや，被災したところで「私たちができることをやりたい」との思いを強く語ってくれた学生たちの熱意によって，被災地での支援活動の実現は早々に進められていった。

また，被災者を支援するという活動目的に加え，被災地で体験する非日常的な出来事を通して，学生たちには机上ばかりでは論じることの難しい人生観を深めることや，大学で学ぶ学問に結び付けて観て・聴いて・考えられる時間になることを期待した。刻々と変化する被災地の状況に合わせた支援に戸惑い，試行錯誤することも想定し，自分自身とも向き合う体験（自己覚知）が，学生の成長にもつながるのではないかと考えていた。

筆者は先述した小学校教員との出会いを機に，避難所を支援活動拠点と決め，発災から 1 ヶ月後となる 2011 年 4 月 12 日から閉鎖される日までを活動期間と定めた（2011 年 8 月閉鎖）。この避難所には，津波被害によって自宅を流出した方の他，地盤沈下や冠水によって移動手段を失い，

避難所まで自衛隊のヘリコプターで救助された方が多く身を寄せていた。本来，ボランティア活動とは自分の食事や宿泊，必要な装備をすべて整え，自己完結しなければならないが，この支援活動は，避難所運営に携わる方々や避難者からの理解を得て，同じ生活環境（衣食住）を体験することができた。特徴的なことを挙げると，日付をまたぐ支援活動であり，朝のラジオ体操や清掃，食事，日中の活動はもちろん，夜は入浴や年齢を問わず避難所で生活を続ける多くの被災者と時間を過ごした（表1）。学生たちには，避難所で生活を続ける主に高齢者や子どもと関わる時間が多いことや，同じ意思と目的をもった一つの組織で継続的に取り組むことを説明し，学生の活動日程・期間は異なるものの，情報の共有を図ることも意識した。

表1.　ボランティア活動の流れ（1日）

6:00	（起床）	13:00	子どもたちの遊び・学習支援 高齢者の話し相手 入浴移動支援
6:30	ラジオ体操		
7:30	清掃	17:00	夕食の配給，（夕食）
8:00	朝食・昼食の配給，朝食	18:00	入浴移動支援，入浴
9:00	子どもたちの遊び・学習支援 高齢者の話し相手 避難所運営手伝い	19:30	子どもたちの遊び・学習支援 避難者の話し相手
12:00	（昼食）	21:00	（記録の記入，就寝）

II.　研　究　目　的

自然災害からの復旧・復興・創生には，自助・共助・公助の力が欠かせないと言われる。そのなかで，東日本大震災による被害状況を知り，心を突き動かされて災害ボランティア活動に取り組む学生の姿を見てきた。筆者は学生とともに活動を続けるなかで，この経験を大学時代の思い出にするばかりでなく，日頃から学んでいる福祉や防災学習（教育）に結びつけられる何かを体験的に学び取って欲しいという期待もあった。

本稿では，災害急性期における対応が一応の落ち着きが見られた時期（地域によって異なるが），多くのボランティアニーズのあるなかで，ある避難所で支援活動に取り組んだ学生の記録を用いて，気づきや学び整理し，災害ボランティア活動を通した福祉や防災教育を考察する。そして，東日本大震災から10年を機に，これからの福祉や防災教育への期待を模索したい。

III.　研　究　方　法

1）　対象者

東日本大震災時，ある避難所での支援活動に取り組んだ学生160名を対象者にする（延数）。

2）　手続きと調査手法

被災地で取り組む支援活動の記録は，いずれ意義を見出すものになるだろうと考えた他，活動の引継ぎや学生指導にも活用できることから，1 回（1 日）を振り返るシートを作成した。振り返りシートは下記の 6 項目からなる。

・支援活動を通して気づいたこと
・支援活動で心掛けたこと（配慮したことなど）
・支援活動で印象に残ったこと
・これから必要だと思う支援内容（不足や取り組まれていない支援など）
・今後の被災地支援活動で目標にしたいこと（どのように取り組みたいのかなど）
・感想（支援活動に対する自己評価）

学生には事前指導を含めた支援活動ミーティングのなかで配布し，1 日の活動終了後に記入と提出を依頼した。その際，避難所の閉鎖までを支援活動期間と定めていることから，活動の引継ぎにも活用したいことを伝えた。

避難所での支援活動期間は 2011 年 4 月 11 日から 2011 年 7 月 31 日までであり，大学の授業が開始された 5 月以降は週末を利用して取り組んだ（実質 36 日間）。

本稿で示す結果は，筆者が学生の振り返りシート（33 日分）を項目ごとに KJ 法を用いてまとめた。

3）　倫理的配慮

学生には振り返りシートの項目に沿い，思いのままに記入するよう説明した他，提出をしたか否かで，成績の評価や大学生活への影響は及ばないことを併せて伝えた。また，筆者が振り返りシートの提出を強く要求することは控え，学生からの提出を待つこととした。そのため，学生が提出することで本研究に同意したものと判断している。

なお，本稿は日本社会福祉学会及び日本福祉教育・ボランティア学習学会の研究倫理指針に則り，対象者個人が特定されることのないよう統計的な処理をおこなっている。

IV.　結　　果

本稿には学生の振り返りシート項目のうち，支援活動を通して気づいたこと，支援活動で心掛けたこと，今後の被災地支援活動で目標にしたいことの 3 つを示す。

なお，記録内容の［/］は活動日を表している。

1）　支援活動を通して気づいたこと

学生から 178 の内容が挙げられた。その内容を【避難所生活への気づき】,【被災者の気持ちの変化への気づき】,【子どもの発達に関する気づき】,【自分への気づき】,【被災地の様子に関する気づき】の 5 つにカテゴリー化して表 2 に示す。

表 2.　支援活動で気づいたこと

カテゴリー	サブカテゴリー	記録内容（N = 178）
【避難所生活への気づき】	支援物資の在り方	・物資（衣類）などたくさん送られてきているが，必要とされる物が少ない。[4/15] ・配給の段ボールの量が多い。[4/22] ・季節により，必要な物が大きく変わっていくだろうと思う。[5/29] ・物資の保管方法が悪く（カビや虫食い），使用ができない物もあった。[7/3]
	食事の変化	・毎朝，同じ食事が配られている。[4/24] ・食事がだいぶ良くなった。同じパンから果物やお弁当が出るようになった。[6/4] ・お年寄りの方々が毎日の食事に飽きている。[6/18] ・食事でサラダを食べたいという要望が多かった。[6/19] ・食事のおかずは増えたが，パンの種類は毎回同じで返却する人も多い。[7/9]
	避難所での過ごし方	・ほとんどの人が仕事や家の片づけで避難所を空けているが，ずっと避難所で過ごしている人もいた。[4/15] ・避難者同士のグループが作られたり，孤立している人がいるように見えた。[4/20] ・避難所の方々は工夫しながら生活をしている。[4/30] ・少しずつ，避難所の中でも普段の生活の雰囲気に戻りつつある。[4/30] ・日中は避難所に人が少ない。[5/21] ・仮設住宅が決まり，避難所の人数が減っている。[6/12] ・仮設住宅へと移動していく人が増え，避難所の方々が減ってきた。[6/19] ・プライベートスペースが少ない。[7/2] ・避難所の中にはルールがあり，それに従って生活をしていた。[7/2] ・避難所は暑さがこもりやすく，過ごしづらい。[7/10] ・人が少なく，避難所の閉鎖を改めて感じた。[7/23] ・集団生活の中での難しさや問題点があることを知った。[7/24] ・仮設住宅に移った人が多く，必要とされるニーズが変化してきている。[7/31]
【被災者の気持ちの変化への気づき】	憔悴した様子	・津波被害で家を失われた方々から，話を聞くことで悲しみが伝わってきた。[4/14] ・話を誰かにできることで，被災者は気持ちをまぎらわせている。[4/16] ・避難している人は笑っているが，精神的に疲れが見える。[4/19] ・津波の話を繰り返す方がおり，あの時の恐怖は残っていると感じた。[5/22] ・仮設住宅に移る人が多くなり，今まで会話をしていた人がいなくなり寂しそうに見えた。[7/3] ・よく寝られていない様子があり，疲れが残っている人もいる。[7/10]
	事実と向き合う強さ	・前向きな地域の人々の姿勢のすごさを感じた。[4/12] ・被災した人たちが現実と向き合って進んでいこうとしている。[7/31]

【被災者の気持ちの変化への気づき】	事実と向き合う強さ	・とてもつらい思いをしているのに，私たちを笑顔で迎えてくれる人たちの強さ。[5/1]
	支援者との関係	・ボランティアをすべての人が良いと思っているわけではない。[4/24] ・新しいボランティア活動者だと，同じ話をするから疲れるようだった。[6/5] ・避難所に生活する方々は温かく話やすく迎えてくれる。[6/18]
【子どもの発達に関する気づき】	言動の表現方法	・子どもたちの地震による心のダメージが大きい。[4/16] ・子どもたちも被災者で，親を亡くした子もすごく明るく元気でびっくりした。[4/22] ・子どもたちは甘えたいのに素直に甘えることができていない。[6/11] ・子どもたちの行動・言動が荒々しい。[6/11] ・子どもたちの暴力的な行動は男子学生に対してである。[6/12] ・子どもたちの言動がストレスで攻撃的だった。[6/18]
	受容する力	・学習スペースを作ったら，多くの子どもたちが活用してくれた。[4/20] ・子どもたちは遊びたくて仕方ない。[5/1] ・時間が経つにつれ，子どもたちも自分から近づいてくれるようになった。[7/23] ・子どもたちはボランティアを楽しみにしている。[7/24] ・子どもたちが別れの時間を惜しみ，自分たち（学生）を必要としていた。[7/31]
【自分への気づき】	人間関係の築き方	・お年寄りや子どもたちへのコミュニケーションはとりやすいが，その中間の年齢の方への対応が難しい。[4/16] ・自分たちが普通でいることが一番で，自分から話しかけていく必要がある。[4/21] ・挨拶の重要性。[7/17] ・自分が避難所の人たちと壁があると勝手に思い込んでいた。[6/19] ・何度も関わることで，何を話していいのかわからなくなった。[6/26] ・被災された方と関係が出来，普通に話をしてくれた。[4/18]
	支援の手応えとやりがい	・継続的にボランティアすることで，被災者が話しやすく馴染みやすい。[6/19] ・継続することで，信頼関係がより深く築かれた。[7/17] ・地域の人が安心で安全な生活が送れるように，小さなことでもボランティアをすることにやりがいを感じた。[4/19] ・必要ないと思っていた子どもたちとの触れ合いが，実は求められていた。[4/20]
	支援の無力さ	・私たちは本当に必要とされているか。[4/23] ・ボランティアに来たはいいけど，結局，自分は無力だなと思う。[6/12] ・ボランティアの関わりに差がある。[6/18] ・ボランティアの位置づけとやるべき内容。[7/31] ・自分自身，疲労感がとてもあった。[7/24]
【被災地の様子に関する気づき】	被災地の理解	・津波を直接受けた地域を見て，あまりの状況に驚いた。[4/13] ・実際に避難所を巡り，避難されている方や専門職の方の生の声を聞き，報道と現状にギャップがあった。[4/17] ・いかに対策が十分でないかを知った。[4/19] ・まだまだ津波の被害は激しく，被災地の状況は変化していない。[7/3]
【被災地の様子に関する気づき】	被災地の理解	・落ち着いてから被災地を見ることができ良かった。[7/9] ・現地の津波被害の現状。[7/24] ・被災地の被害や避難所の現状。[7/31]
	支援の実態	・様々な企業がスポーツ教室や移動食事車などの活動をしていた。[4/14] ・他大学などの様々な人が支援をしている。[5/1]

支援活動を通して，最も多く挙げられた内容は【避難所生活への気づき】である。そのうち，「ほとんどの人が仕事や家の片づけで避難所を空けているが，ずっと避難所で過ごしている人もいた」や「避難所の方々は工夫しながら生活をしている」，「仮設住宅へと移動していく人が増え，避難所の方々が減ってきた」，「人が少なく，避難所の閉鎖を改めて感じた」など，被災からの時間の経過とともに，避難所そのものの生活環境が変容していくことへの気づきが記されていた。そして，「物資（衣類）などたくさん送られてきているが，必要とされる物が少ない」や「毎朝，同じ食事を配られている」といった生活の基本的なことを含め，衣・食・住に関する気づきであることがわかる。

次に【被災者の気持ちの変化への気づき】が挙げられ，「避難している人は笑っているが，精神的に疲れが見える」や「津波の話を繰り返す方がおり，あの時の恐怖は残っていると感じた」など，憔悴した様子が記された一方，「前向きな地域の人々の姿勢のすごさを感じた」や「被災した人たちが現実と向き合って進んでいこうとしている」という被災者の人間的な強さも記されていた。また，被災者の本音も見聞きしたことで，「ボランティアをすべての人が良いと思っているわけではない」や「新しいボランティア活動者だと，同じ話をするから疲れるようだった」など，被災者の心情を汲み取ることで，支援のあり方を問うことにもなっていた。

この支援活動は，避難している子どもたちと一緒に過ごす時間が多く，【子どもの発達に関する気づき】も挙げられている。支援活動を開始したころ，子どもたちの暗い表情や言動を予想していたのか，「子どもたちの地震による心のダメージが大きい」や「子どもたちも被災者で，親を亡くした子もすごく明るく元気でびっくりした」と記している。一方，6月頃には「子どもたちの行動・言動が荒々しい」や「子どもたちの言動がストレスで攻撃的だった」という戸惑いを記している。4月当初の「学習スペースを作ったら，多くの子どもたちが活用しくれた」など，支援に対する反応を喜ぶばかりでなく，どのように子どもたちと関わることが望ましいのか，多くの学生が悩んでいた。しかし，支援活動終了日には，「子どもたちが別れの時間を気にしながら過ごし，自分たち（学生）を必要としていた」など，支援活動に対する有用感も得られていた。

ときに，学生は自分が取り組む支援活動に手応えが感じられず，「何度も関わることで，何を話していいのかわからなくなった」や「ボランティアに来たはいいけど，結局，自分は無力だなと思う」など，支援内容がマンネリ化したような内容を記してもいる（【自分への気づき】）。一方，「継続することで，信頼関係がより深く築かれた」や「地域の人が安心で安全な生活が送れるように，小さなことでもボランティアをすることにやりがいを感じた」など，少しずつ支援活動に手応えややりがいを感じてもいた。

学生は，「実際に避難所を巡り，避難されている方や専門職の方の生の声を聞き，報道と現状にギャップがあった」や「様々な企業が方法を考え，スポーツ教室や移動食事車などのボランティア活動をしていた」など，総括的に【被災地の様子に関する気づき】も挙げている。テレビや新聞などのメディアを通して，被災地の状況をイメージしてきたのだろうが，被災者や支援者と直

接出会い，実情を把握することにつながっていた。

2）支援活動で心掛けたこと（留意したこと）

学生から 187 の内容が挙げられた。その内容を【被災者との距離感】，【自分の活動姿勢】，【被災者との会話】，【活動内容の理解】の 4 つにカテゴリー化して表 3 に示す。

表 3.　支援活動で心掛けたこと

カテゴリー	記録内容　（N=187）
【被災者との距離感】	・今，その瞬間に何が必要なのかを相手の雰囲気や言葉から感じる。[4/15] ・一人ひとりの気持ちに寄り添う。[4/16] ・常に笑顔で避難所にいる人たちに接する。[4/18] ・被災された方に失礼がないようにした。[4/19] ・相手のやりたいことを一緒にしてみる。[4/20] ・どこまで話に踏み込んでいいのか。[6/11] ・ストレスを多く溜めていると感じたので，なるべく相手の話を聞くようにした。[6/4] ・何をしてほしいのか，何がしたいのかを自分で見極める。[6/11] ・相手の生活リズムを崩さない。[6/12] ・安心して話してくれるように気を配る。[6/18] ・自分から壁をつくらない。[7/2] ・不快な気持ちを与えない。[7/2] ・最後のボランティア活動だという雰囲気を出さない。[7/17] ・話をする際にあまり深入りしない。[7/24] ・安易に次回の約束をしない。[7/31] ・生活している人のプライバシーを考える。[7/31]
【自分の活動姿勢】	・不安な顔を見せず，明るくするようにした。[4/12] ・挨拶をしっかりする。[4/13] ・自然な態度でいる。[4/16] ・これまでの経験を活かして活動する。[4/17] ・自分も楽しむ。[4/20] ・できるだけたくさんの方と関わる。[4/23] ・笑顔を絶やさない。[4/24] ・挨拶と笑顔。[6/12] ・仲間とともに必要とされる活動をする。[6/19] ・後悔しない活動をする。[7/10] ・笑顔で自分自身が楽しみながらおこなう。[7/17] ・戸惑っても笑顔を絶やさない。[7/23]
【被災者との会話】	・いろいろな人々と交流し，話を聞けるように心がけた。[4/13] ・避難している方々とコミュニケーションをとる。[4/14] ・自分から積極的なコミュニケーション。[4/17] ・自分からは被災の話題を出さないようにコミュニケーションをとる。[4/18] ・津波のことなどを聞いたりせず，なるべく楽しい話で盛り上げて過ごした。[4/21] ・会話の内容を明るい話題にし，関わる人みんなが楽しくなるようする。[5/21] ・被災者と親しみやすい積極的なコミュニケーションをとる。[5/29] ・子どもたちへの言葉。[6/5] ・震災のことについて，私自身からは話さない。[6/11] ・ちょっとした会話や関わりを大切にする。[7/3] ・できるだけ人と関わる。[7/13]
【活動内容の理解】	・できるだけ，広い視野で被災地を捉える。[4/12] ・今，どんなことをしてもらいたいのかなということを考えて行動する。[4/15]

【活動内容の理解】	・他の人のことを考えながら行動する。[4/19] ・積極的に必要なことを聞いて動く。[4/20] ・決してゲストにならない。[6/11] ・騒がしくしない。[6/18] ・ニーズに対して迅速な対応をする。[7/3] ・自分から仕事を見つける。[7/9] ・自分から仕事を見つけるよう積極的に動く。[7/23] ・自分にできることを考え，テキパキと行動する。[7/31]

支援活動を通して，最も多く挙げられた内容は【被災者との距離感】である。そのうち，「今，その瞬間に何が必要なのかを相手の雰囲気や言葉から感じる」や「一人ひとりの気持ちに寄り添う」,「常に笑顔で避難所にいる人たちに接する」,「被災された方に失礼がないようにした」など，緊張した面持ちのなかで支援活動を始めたことがわかった。学生は「どこまで話に踏み込んでいいのか」や，「不快な気持ちを与えない」,「話をする際にあまり深入りしない」など，被災者との関係をどのように築いていくことが望ましいのかを考える一方，支援活動の終盤を迎えると，「最後のボランティア活動だという雰囲気を出さない」や「安易に次回の約束をしない」とも記していた。長期的に被災者と関わることで関係を築くことができることを理解しながらも，避難所という限られた支援場所や期間で実施していることを把握し，被災者に過度の期待を抱かせるような言葉を発しないことを心得ていた。

また，「自分からは被災の話題を出さないようにコミュニケーションをとる」や「震災のことについて，私自身からは話さない」など，悲しい出来事に触れない会話も挙げられた。(【被災者との会話】)。【被災者との距離感】と関連していることがわかる。被災者と会話をする際，「津波のことなどを聞いたりせず，なるべく楽しい話で盛り上げて過ごした」など，東日本大震災の出来事を思い出させないよう心掛けていた。避難所の雰囲気を明るくしようと，被災者が楽しめる話題を提供していたことがわかった。

そして，「挨拶をしっかりする」や「自然な態度でいる」などの礼儀に加えて，「不安な顔を見せず，明るくするようにした」や「笑顔を絶やさない」など，被災者には明るい表情で接する姿勢が記されていた（【自分の活動姿勢】)。【被災者との距離感】や【被災者との会話】に記した取り組みを実践するには，礼儀や支援活動に取り組む姿勢を心掛けていたことがわかった。何らかの実習やボランティア経験があるのか，「これまでの経験を活かして活動する」と記した他，「仲間とともに必要とされる活動をする」など，一人で気負うことなく取り組んでいる学生もいた。

さらに，客観的に支援活動を捉えようとする学生もおり，「今，どんなことをしてもらいたいのかなということを考えて行動する」や「決してゲストにならない」,「自分から仕事を見つける」など，一方的な支援にならない心掛けも記されていた（【活動内容の理解】)。

この支援活動は被災者と関わりをもつことで，今，必要とする支援内容を汲み取っていくことが求められ，学生はたくさんの被災者と関わるなかで，活動内容を見極めようとしていることがわかった。

3）今後の被災地支援活動で目標にしたいこと

学生から169の内容が挙げられた。その内容を【被災者との関係性を深める】,【必要とされる支援を考えて取組む】,【被災者の気持ちを考える】,【子どもとの時間を多く過ごす】,【長期的な支援を考え続ける】の4つにカテゴリー化して表4に示す。

今後の被災地支援活動での目標として，最も多く挙げられた内容は【被災者との関係性を深め

表4.　今後の被災地支援活動で目標にしたいこと

カテゴリー	記録内容　（N=169）
【被災者との関係性を深める】	・コミュニケーションを増やしていきたい。[4/12] ・被災者と私たちとの壁を取り除く。[4/16] ・笑顔で適当な距離感を保って接していきたい。[4/18] ・積極的にコミュニケーションをとっていきたい。[4/19] ・一人の人と長く時間を過ごすのではなく，多くの人に気をかけていきたい。[4/19] ・幅広い年代の人とコミュニケーションをとりたい。[5/1] ・もっと多くの方たちと関わるようにしたい。[5/29] ・子どもだけでなく，色々な人と交流して癒してあげたい。[6/4] ・高齢者に話かけて会話をしていきたい。[6/18] ・お年寄りの方々を楽しませるように，コミュニケーションをとる。[6/19] ・避難所の方々と交流を更に深める。[7/2] ・継続して活動することで，私の顔を覚えてもらう。[7/3] ・積極的にコミュニケーションをとる。[7/10] ・もっと避難所の人々と関わりたい。[7/24]
【必要とされる支援を考えて取組む】	・自分に出来ることを自ら進んで見つけ，行動する。[4/13] ・被災から日数が経過するにつれ，変化するニーズに対応するだけでなく自立支援を考える。[4/17] ・自分のできることを考え，行動していきたい。[4/17] ・配給の効率が良く進むように取組む。[4/22] ・共に活動する仲間との情報を共有する。[4/23] ・何をすればいいのか戸惑う時間を無くしたい。[5/1] ・毎日，ニーズが変わるので，それに合わせた活動をする。[6/12] ・頼まれたことを最後までやりたい。[7/10] ・もっと被災者に必要な支援をおこなう。[7/10] ・自分から仕事を探し，効率の良い活動をする。[7/23]
【被災者の気持ちを考える】	・人の気持ちや環境面を考えながら取り組みたい。[4/15] ・（被災者の前で）泣かない。[4/18] ・心の痛みを忘れない。[4/19] ・継続することで，信頼関係を築き，深いところにある思いを聞く。[6/18] ・期待を裏切らず，楽しく活動する。[6/26] ・被災者の体調を気にかける。[7/3] ・話すことを好む人と好まない人がいることを見極めて会話をする。[7/17] ・積極的に関わり，気持ちを汲み取って接することができるように努力したい。[7/24]
【子どもとの時間を多く過ごす】	・子どもたちとコミュニケーションをとれるようにしたい。[4/12] ・避難所に設置されたパソコンで遊ぶ子どもが多いため，一緒に外で体を動かす。[4/16] ・遊んだり，食べたり，学習したり，普通の生活ができるように支援する。[4/20] ・子どもたちと一緒に遊んで，コミュニケーションを深めたい。[4/21] ・すごく寂しそうで，子どもたちの遊び相手をしてあげたい。[4/23]

【子どもとの時間を多く過ごす】	・子どもたちとの時間を多くとる。[4/30] ・子どもたちに避難所生活の方法を間接的に教える。[5/21] ・消灯時間以降の子どもたちの過ごし方を教える。[5/29] ・子どもたちとうまくコミュニケーションを図りたい。[6/11] ・幅広い学年が楽しく遊べる遊びを考える。[7/10] ・外で子どもと体を動かして遊ぶ。[7/23]
【長期的な支援を考え続ける】	・仮設住宅での支援も検討したい。[7/17] ・つながりをどこかで絶やさずにいたい。[7/24] ・被災地を忘れない。[7/31] ・自分に何ができるのか，その地域や人々にどんなニーズがあるのかを考える。[7/31] ・今，何が必要なのか，自分に何ができるのかを考えて行動することが復興への一歩。[7/31] ・被災地のニーズは異なり，難しさを痛感したため，苦しみを抱える人への心のケアをしたい。[7/31] ・相手のこと，後のことを踏まえた支援をおこなう。[7/31]

る】である。そのうち，「コミュニケーションを増やしていきたい」や「もっと多くの方たちと関わるようにしたい」，「子どもだけでなく，色々な人と交流して癒してあげたい」などと記している。「お年寄りの方々を楽しませるように，コミュニケーションをとる」や「避難所の方々と交流を更に深める」など，支援活動の回数を重ねることで，高齢者や子どもたちばかりでなく，多くの人々との関わりを目標に挙げている。さらに，「継続して活動することで，私の顔を覚えてもらう」や「もっと避難所の人々と関わりたい」など，この避難所における長期的な支援活動を意識した目標も挙げられた。

そして，「被災から日数が経過するにつれて，変化するニーズに対応するだけでなく自立支援を考える」や「配給の効率が良く進むように取組む」，「毎日，ニーズが変わるので，それに合わせた活動をする」など，具体的な支援方法を考える目標が挙げられた（【必要とされる支援を考えて取組む】）。支援活動を開始した当初は，被災者と関わることばかり意識していたが，避難所の生活環境を知り，避難所での運営にも関わる時間が増えたことで，食事や物資の配給方法を考える余裕もあった。

被災者の気持ちを考える目標として，「人の気持ちや環境面を考えながら取り組みたい」や「被災者の体調を気にかける」なども記されていた（【被災者の気持ちを考える】）。なかには，「（被災者の前で）泣かない」や「心の痛みを忘れない」など，自分自身の誓いのようなことも記されている。

一方，「子どもたちとコミュニケーションをとれるようにしたい」や「体育館のパソコンで遊んでいる子どもたちが多いので，積極的に話しかけ，外で一緒に遊んで体を動かすこと」，「遊んだり，食べたり，学習したり，普通の生活ができるように支援する」など，子どもたちへの支援目標を挙げられた（【子どもとの時間を多く過ごす】）。この支援活動では，子どもたちに関わることが求められたため，「子どもたちに避難所生活の方法を間接的に教える」や「消灯時間以降の子どもたちの過ごし方を教える」など，集団生活のあり方を伝えようとする目標もあった。

これからの被災地支援活動や自身の生活における目標として，「仮設住宅での支援も検討したい」や「つながりをどこかで絶やさずにいたい」,「被災地を忘れない」などと記した学生もいる。「自分に何ができるのか，その地域や人々は，どんなニーズがあり，何を必要としているのかを考える」や「今，何が必要なのか，自分に何ができるのかを考えて行動することが復興への一歩」という，支援活動での体験をこれからの目標につなげてもいた（【長期的な支援を考え続ける】）。

V. 考　　察

これまでに取り組んできたいくつかの支援活動（参与観察）も含めながら，1）災害ボランティア活動（避難時支援活動）で学んだこと，2）これからの福祉や防災教育に期待したいことの2つから考察する。

1） 災害ボランティア活動（避難所支援活動）で学んだこと

筆者は特に人と関わる学びついて挙げたい。

被災者のためにと思う気持ちが適切な支援へと結び付かずに苦闘する学生は多く見受けられた。特に避難所での支援活動は，学生に高齢者や子どもたちと関わる目的を伝えてはいたものの，決められた具体的な活動指示は少なく，求められる支援内容を見出すことの難しさを感じただろう。

初めて（1回目）参加する学生は，被災者とどのようなコミュニケーションをとればよいのか戸惑い，避難所という場所を知り，その環境の雰囲気に慣れることが優先され，周囲の人々に目を向ける余裕はない。一緒に参加する学生と離れることなく立ち尽くす姿があった。だからこそ，活動記録には反省の弁が多く，「コミュニケーションを増やしていきたい」や「もっと多くの方たちと関わるようにしたい」など，被災者との関係構築に課題を見つけ，次回（または2日目）以降の支援活動目標に設定することが多かった（表4）。しかし，「ボランティアをすべての人が良いと思っているわけではない」や「新しいボランティア活動者だと，同じ話をするから疲れるようだった」と，変化する被災者の気持ちに対する気づきも得られていた（表3）。ある学生の記録に「人の気持ちや環境面を考えながら取り組みたい」や「心の痛みを忘れない」という支援目標が設定されていた。学生は自身の欲望を満たそうと思うばかりの言動が先走り，被災者との関係に何らかの障壁があったのだろう。

他方，「挨拶をしっかりする」という基本的な礼儀に加え，「今，その瞬間に何が必要なのかを相手の雰囲気や言葉から感じる」や「一人ひとりの気持ちに寄り添う」など，被災者との距離感を心掛けている学生もいた（表4）。また,「いろいろな人々と交流し，話を聞けるように心がけた」や「避難している方々とコミュニケーションをとる」,「不安な顔を見せず，明るくするようにした」という活動に対する姿勢も記されていた（表4）。具体的な活動指示がない故に，自らの判

断や行動が求められるなかで，「できるたけ，広い視野で被災地を捉える」や「今，どんなことをしてもらいたいのかなということを考えて行動する」などと記された内容からも，刻々と変化する被災地の状況に併せて行動し続けること，考え続けることが，活動開始の早い段階から理解できたようにうかがえる（表3）。そして，活動中期（5～6月）には，「相手の生活リズムを崩さない【被災者との距離感を意識】」や「決してゲストにならない【活動内容の理解】」など，被災者の生活のなかで関わるボランティアの存在や位置づけが記されていた（表3）。

また，筆者が活動拠点とした避難所の周辺には500名を超える避難所と200名程度の避難所が開設されていた。大規模な避難所には福祉支援を要する避難者スペースがあり，医療・福祉専門職が常駐していたことに加え，多くのボランティアが入れ替わるように携わっていた。学生が周辺の避難所の様子を目にすることで，指定避難所であっても，異なる生活環境があることを知った。ある学生は「避難所の中にはルールがあり，それに従って生活をしていた」や「他の避難所は仕切りがあるけれど，ここの避難所にはない」といった記録を記している（表2・表7）。筆者が活動拠点とした避難所では，他の避難所で見受けられた仕切りのような段ボール板はなく，閉鎖されるまでの期間，被災者全員が顔を確認できる生活を送っていたことから，避難所の運営方法を学ぶことにもなったといえる。避難所の運営者や被災者の理解を得て，食事に同席し，おにぎりや菓子パン，スナック菓子などを一緒に口にすることもあった。なかには，大規模避難所に設置された自衛隊の入浴支援（お風呂）を被災者と一緒に利用した学生もいる。周辺の避難所や近くの商店などに同行することで，厳しい避難所生活の一部を体験できたことは，筆者が計画した避難所における支援活動の特徴の一つである。被災者のこれまでの生活や身近な人を失った辛い体験を聞きながら，商店でアイスクリームをご馳走になり，被災者を支援するために被災地へと来たはずが，同じ時間を過ごすばかりで，支援内容を確認してきた学生もいた。ときには，「私たちは本当に必要とされているか」や「ボランティアに来たはいいけど，結局，自分は無力だなと思う」と感じた学生はいたが，支援活動への参加を何度も希望し，意欲的に活動する学生の様子から，長期的に活動を続ける意義も見出されたようにうかがえる。福山（2011：31）が，ボランティアは動的に行動するばかりでなく，被災した人々の隣で静的な行動をすることも十分な価値があると述べており，学生は被災者との時間や空間のなかで，人と関わることの喜びや難しさを学ぶ機会になったといえる[18)]。

次第に，学生はボランティアという立場よりも，被災者から何等かのことを学びたいと思う立場（学習者）へと意識が変わっていったようにもうかがえる（表4）。菅（2011：64）が，支援者と被災者が互いに力を補い合い相乗的な効果を生み出していく活動とボランティアを捉え，より大きな効果が期待できること述べているように，単発的な活動にせず，数か月，数年の単位で関わる長期的な支援活動は，学生はもとより被災者のエンパワメントにも結び付けることができた[19)]。筆者の意図としたこと（日頃から学ぶ福祉や防災学習（教育）に結びつけられる何かを体験的に学び取って欲しい）が理解されていたようにうかがえる。これまでに筆者が学生たちとと

もに取り組んだ避難所や仮設住宅での支援活動は，福祉や防災を学ぶ教育の一環としても，時間や空間から成果を得られたように示唆する。

2）　これからの福祉や防災教育に期待したいこと

災害時におけるソーシャルワークとは何か，福祉とは何かを学習するために，筆者が取り組んだ避難所での支援活動は，被災者のより近いところで，被災者との関係を構築しながらソーシャルワークの基本を体験的に伝える環境にあった。以前，三浦ら（2012：28）は，この支援活動を「災害時にソーシャルワークが何をすべきかを伝えることは難しかったが，災害時であってもソーシャルワークの原理は変わるものではないということが伝えられたのではないかと思う」と評価している[20)]。平成30年7月豪雨における災害ボランティアセンター運営支援活動プロジェクトに取り組んだ山本（2019：78）は，「学生という存在は，専門職とは異なる印象を被災者に与えつつ，緩やかに被災者が被災地と向き合える」と述べている[21)]。そして，学生の活動記録から「さらには，このプロジェクトに参画した学生たちの活動記録・感想などを見ると，学生自身が災害支援の現場からソーシャルワークを学んでいるようすがうかがえる」とも述べている[22)]。

支援活動を通して，学生は被災者からの「来てくれてありがとう」や「今度はいつ来るの?」といった言葉に，自分自身が必要とされていることを感じ，被災者のために自分の出来ることを模索する時間につながっている。学生が感じ考えたことは，被災者の悲しみや辛さ，これからの希望や生きる強さを汲み取ることから始まっている。また，被災者の生活に寄り添い，避難所での実際の生活を体験する特徴的な活動であったことから，生活支援とは何かを多く考える時間だっただろう。福祉を学ぶ学生にとっては，対人援助の基本的な技術の必要性を感じることにもつながったようにうかがえる。具体的には，被災者の生活支援とは何か，被災者への直接的・継続的な支援とは何か，避難所で一緒に遊び・学習をした子どもたちの発達支援とは何か，避難所での支援活動は4ヶ月間であったものの，この時間を通してソーシャルワークの過程で考えられたことは多い。この経験から福祉の視点での「支援」を学ぶ機会にもつながったと示唆する。

そして，津波の被害を受けた場所や避難所で生活する方々の以前の生活拠点（地域）にも立ち寄り，自分ごととして自然災害を考える機会を設定した。被災地の惨状を目にして「津波を直接受けた地域を見て，あまりの状況に驚いた」や「いかに対策が十分でないかを知った」，「まだまだ津波の被害は激しく，被災地の状況は変化していない」など，学生は復旧・復興の歩みを想像するとともに，防災意識を高める機会にもつながった（表3）。小林（2014：248）は，「こちらが何らかのお役に立てるというよりも，かえって各地の方々のお手を煩わせつつ，震災や津波に関する学習をさせていただいた，といったあたりが正直なところではなかったか」と述べているが，筆者も同じように被災者が学習の場を提供してくださったように思っている[23)]。それは，避難所で昼夜を過ごし，被災者から津波の恐ろしさを聞くことで想像を遥かに超えた自然の力や命の尊さを知り，慰霊祭に一緒に出席するなどの貴重な体験を学生がしていたからである（表5・

表6)。今だからこそ，学生の記録を整理し，「ともに生きる力を育む」という福祉教育の目標に結び付けられる支援活動が展開できたのではないかと評価したい。学生に被災者の体験や教訓は伝わっただろう。「被災地を忘れない」や「自分に何ができるのか，その地域や人々にどんなニーズがあるのかを考える」といった記録が残され，長期的な支援を考え続ける姿勢やこの出来事を風化させてはいけないという思いが伝わってくる。

毎年，何らかの自然災害が日本のどこかで起き，各被災地で復旧･復興が進められている今日，福祉や防災学習（教育）は特別なものと言い難い。これまでに取り組んできたいくつかの支援活動から福祉や防災の学習（教育）を考えれば，常に「人」が存在する実践的な科学とも捉えることができた。支援を提供する立場ばかりでなく，ときには援助を受ける立場になることもあるだろう。過去にあった出来事や歴史，その背景を知ることは大切なことである。東日本大震災の経験と教訓は，未来へとつながる教材となり，これからの人々に継承されていくことを期待したい。被災した地域では今も長期的な支援を必要としている。福祉の視点から「支援」を捉え，防災・減災の視点から「生活」を学び，連動性ある学習機会を創り出していくことも期待する。そして，誰もが同じ地域に暮らす人を知り，あと一つの情報，あと一つの関わりを持ち，自分ごととして福祉や防災を実践し続けることを切に願いたい。

お　わ　り　に

東日本大震災から10年が経過する今日，多くの人々が被災地の復旧・復興に何等かの形でかかわり，新たな街づくりを考えてきた時間でもあったように振り返られる。

東日本大震災では，甚大な被害を受けた地域の光景が連日のように報道されていた。その被災情報から被災者の様子を想像し，恐れるように避難所へと足を踏み入れた学生の表情は硬く，当初はボランティアとして支援活動をともに実践できるのか，筆者自身が不安を抱いたことは事実である。しかし，「被災地には息の長い支援が必要だ」という言葉からも，被災地の一つである仙台の地で福祉を学ぶ学生とその教育に携わる者として，被災者に寄り添い続ける使命があったように思う。災害ボランティア活動の経験が乏しかった筆者にとって，どのような被災地及び被災者支援ができるのか，試行錯誤の連続であったことは言うまでもない。復旧・復興・創生を目指す地域のなかで，被災した人々やそこで支援をする人々との出会いから，福祉とは何か，防災･減災とは何かを問い続けてくることができた。今日，薄れゆく東日本大震災の記憶があることは確かであり，あの日からどのようにして被災者は立ち上がり，生活復興の歩みを進めてきたのか，この10年で自然災害との向き合い方は変わっただろうか。忘れてはならない出来事として，東日本大震災の経験や教訓を伝え続けていきたい。

最後に，かけなえのない時間をともに刻んだ多くの皆様に感謝の意を表す。

本稿は，2011 年に日本福祉教育・ボランティア学習学会 第 17 回大会にて発表した『災害支援ボランティアにおける体験と学び-大学生の東日本大震災避難所ボランティア活動記録より-』報告要旨を，東日本大震災から 10 年となる機に大幅な改正をし，稿を起こしたものである。

参考・引用文献

1） 東日本大震災復興対策本部（2011）「東日本大震災からの復興の基本方針」（https://www.reconstruction.go.jp/topics/doc/20110729houshin.pdf, 20201029）

2） 加藤基樹（2011）『0 泊 3 日の支援からの出発　早稲田大学ボランティアセンター・学生による復興支援活動』早稲田大学出版部

3） 茶屋道拓哉，筒井睦（2012）「東日本大震災における学生ボランティア活動の教育的意義」『九州看護福祉大学紀要』Vol 12 No 1 pp 25-37

4）5） 市川享子（2011）『東日本大震災支援活動に携わった大学生の学び― Campus Compact 版アセスメントシートを活用して―』日本福祉教育・ボランティア学習学会第 17 回京都大会報告要旨集 pp 134-135

6） 川上富雄（2013）『災害ソーシャルワーク入門』第 2 章　社団法人日本社会福祉士養成校協会

7） 後藤至功（2018）『災害ボランティア入門―実践から学ぶ災害ソーシャルワーク―』ミネルヴァ書房 pp 120-125

8） 萬羽郁子・大竹美登利・坂田隆他（2018）『東日本大震災後の宮城県石巻市における支援活動からみた生活支援の仕組みづくりとその展開』東京学芸大学紀要　総合教育科学系 II 69 pp 363-374

9） 和秀俊（2014）『東日本大震災の被災地支援における大学の役割―首都圏の大学の復興支援活動から―』田園調布学園大学紀要第 9 号 pp 1-16

10） 遠藤洋二，中島修，家髙将明（2017）『災害ソーシャルワークの可能性　学生と教師が被災地でみつけたソーシャルワークの魅力』中央法規

11）20） 三浦剛，阿部利江（2012）『被災地の生活支援におけるソーシャルワークの役割―これまでのいくつかの支援活動の検討から―』コミュニティソーシャルワーク 9 号 pp 19-28　日本地域福祉研究所　中央法規

12） 上野谷加代子（2013）『災害ソーシャルワーク入門』社団法人日本社会福祉士養成校協会 pp 14-21

13） 太田美帆（2013）「東日本大震災の復旧･復興支援における学生の役割」『玉川大学文学部紀要』第 54 号 pp 167-190

14） 亜細亜大学（2014）『忘れてはならないこと―東日本大震災ボランティア活動報告書 Vol. 2』虹有社

15） 熊上崇（2015）『東日本大震災の被災地コミュニティに対する大学生の関心と支援―福島県いわき市での実践を通して―』立教大学コミュニティ福祉研究所紀要第 3 号 pp 19-38

16） 長橋幸恵（2019）『対人援助職としての防災教育の展開―被災地から学ぶリスクマネジメントの普及―』大阪城南女子短期大学研究紀要 54 pp 87-100

17） 山本克彦『災害ボランティア入門―実践から学ぶ災害ソーシャルワーク―』ミネルヴァ書房 pp 23-35

18） 福山和女（2011）『災害ボランティアが被災者と関わることのいみ』月刊福祉 8 月号 pp 29-31

19） 菅磨志保（2011）『日本における災害ボランティア活動の論理と活動展開―「ボランティア元年」から 15 年後の現状と課題―』社会安全学研究創刊号 pp 55-66

21）22） 山本克彦（2019）「災害ボランティアセンター運営における課題と展望―学生ボランティアとの協働の可能性―」日本福祉大学全学教育センター紀要第 7 号 pp 71-80

23）小林天心（2014）『忘れてはならないこと―東日本大震災ボランティア活動報告書 Vol. 2』亜細亜大学経営学部　虹有社

資　　料

振り返りシートを提出した学生のうち，支援活動に5回以上参加した7名の感想を抽出して資料に示す。なお，記録内容を「被災地の様子に驚く」,「被災者との関係」,「被災地・被災者の生活環境」,「他の支援団体との協同･連携」,「自分の活動に対する期待や課題」の5つにカテゴリー化し，該当箇所にラインを引き，表5から表9に示すこととする。

表5.　被災地の様子に驚く

学生	回数	記録（感想）内容
A	1回目	思っていた以上に，私たちを受け入れていただけたことに嬉しいと思う。高齢者の方などと会話をしていると，「生きているだけで感謝，うれしい」「いろんな思いをしたけど，何とか生きているから，これからも生きていかなければならない」などと力強い言葉を聞くことができ，私自身が，元気と勇気をもらうことができました。逆に励まされた。子どもたちの行動，言動の荒々しさにとても驚いた。本当は甘えたいのに冷たい態度をとっているようにも見えた。親を亡くしたショック，震災の衝撃の大きさ，子どもたちに影響しているということを実感した。（省略）
B	2回目	昨夜から朝までの時間で，被災者の方に津波の話などとても貴重な話を聞くことができました。想像を遥かに超える自然の力にとても驚きました。（省略）
C	1回目	活動を通して，テレビとはまったく違い状況で，やはり実際に足を運んでみなければわからないなと強く感じました。避難所の方，子ども達も，みんな前向きで逆に笑顔であいさつを返して下さる方がほとんどで，どんなに大変でも頑張っていることを感じとることができ，逆に元気をいただいた気がしました。（省略）
E	1回目	初めて被災地でボランティアでしたが，みなさんが優しく受け入れてくれたので楽しかったです。実際に話をしてみても，笑いながら「津波に全部持ってかれちゃったんだよ」と言われた時は切なさを感じました。逆に強さも感じられたような気がします。子どもたちの大学生への対応には驚きを感じました。（省略）
F	1回目	（省略）被災者の方々に今必要なのは癒しだと感じ，楽しくお話しできて本当に嬉しそうなのをみると，自分も嬉しくて逆に元気をもらえた。そして，子どもたちが小さいながら本当に今の状況を理解していて，すごく大人で，周りをみる子たちなんだなと感心した。

表6.　被災者との関係

学生	回数	記録（感想）内容
A	2回目	長くコミュニケーションをとった方には「お姉ちゃんだから言える。気を遣わないでいい」と言っていただけたので，（省略）深い信頼関係を築いていくことができると思った。避難所の方々にとっても，知っている人が来てくれたということで，安心感などもあるのではないかと思った。同じ人が繰り返し行くことも大切なのだと思う。（省略）

A	6 回目	（省略）話に行くと「毎回，来てくれるとこっちも楽だし，いいな」と高齢者の方に言われ継続してきて良かったと思う。（省略）しかし，その会話の中で「思い出させないでくれ」と言われた。私が行くことで津波の恐怖を思い出させてしまっているのかなと感じた。私たちが思っている以上に避難している方は，深く傷をもっていて，ちょっとした言葉で傷をつけることになっているかもしれない。改めて人間と関わることの難しさを感じた。
B	3 回目	（省略）避難所にある段ボールで靴箱を作りました。いろいろな話を避難所の方として楽しく作りました。完成した靴箱にみなさんから「ありがとう」や「すごいね」などの声をかけてもらい嬉しかったです。
C	2 回目	避難所で自然にお話や挨拶などを交わすことができるようになり，避難所の方から声をかけていただけ，少しずつコミュニケーションをとることができ良かったです。
	5 回目	（省略）みんながこれからの不安を口にしていましたが，協力し合い，助け合いながら前に進んでいること，仲間との絆がとても大切であることを改めて感じました。（省略）子どもたちも，慣れない集団生活で厳しい生活ですが，ルールやマナーなどもしっかりと守り，大人から子どもまで，みんなが団結していることを感じました。
D	1 回目	お年寄りの方に話かけるときは迷惑に思われているのか，話しかけて大丈夫なのかがわからずに緊張してしまいました。でも，話しかけたお年寄りの方は，もっと話がしたいと言っていただき，安心してコミュニケーションをとることができました。
	4 回目	（省略）もう少しでボランティアも終わりですが，避難所の方々は，「もう一回くらいは来い」「また絶対来い」などと言ってくれる方がいて，とても嬉しかったです。
	6 回目	（省略）お年寄りの方と話し，震災時の状況を話して下さった方がいて，とても苦労した様子でした。でも，もう下は向いていられないといった感じで楽しい話もしてくれました。（省略）
E	3 回目	私のことを覚えてくれていて本当にうれしかった。「毎回，来てくれるのを楽しみにしているんだ」と言われたときは来て良かったと思いました。前回よりもたくさんお話しができたので，すごく楽しかったです。慰霊祭にも連れてってもらい良い体験をしました。（省略）
	4 回目	（省略）前回よりも楽しく会話が弾んだり，冗談を言ったりなど，お互いに笑顔がたくさん出るようになりました。顔を覚えてくれ本当に嬉しかったです。みなさんが楽しみにしてくれているので，その気持ちを崩すことのないようにしていかなければならないと思いました。数を重ねることで，どう変化しているのかが少しわかりました。
G	2 回目	（省略）お年寄りから荷物を運ぶのを手伝ってほしいなどお願いされました。昨日に比べ，話すときには話題に困ることが少なかったと感じました。（省略）楽しみにしてくれる方もいたので，引き続き支援を続けたいです。

表 7.　被災地・被災者の生活環境

学生	回数	記録（感想）内容
A	4 回目	（省略）避難所では気を張って生活しているが，仮設住宅に移ったら，本当に一人になってしまいどうなるかわからない。高齢者は「もう立ち直れないよ」と言っていた。前向きにいこうとしている方も多くいるが，まだ前向きになりきれていないという方もいることを知った。
	5 回目	（省略）子どもたちの発する言葉が年下の子どもにも影響されているように思った。（省略）仮設住宅へ移っている人も多く，体育館内の雰囲気が少しずつ変化しているようにも感じた。
	7 回目	（省略）暑かったため，少し夏バテのようになっているように見えた。熱中症などにならないように水分補給などを呼びかける必要もあるのではないかと思う。

B	7回目	今日は避難所の閉鎖に伴い片づけばかりでした。避難所から体育館に戻るのを見て，嬉しさ半面，寂しさを感じました。もう人はほとんどいなく，前のようなにぎやかさがなかったです。（省略）
C	3回目	（省略）避難所の方の表情の変化が見られ，本当に必要なものは何かなどを知ることができました。（省略）
	4回目	今日は小学校で始業式があり，子どもたちがとても元気に感じました。（省略）お年寄りは寝ている人が多く疲れている様子でした。また，食事に偏りがあり（省略）もう少しバランスの良い食事ができればなと感じました。髪を切って下さる方が来ていて，避難所の方がとても助かるなと言っていた言葉が印象に残りました。
D	2回目	朝から仮設住宅へ移動するため，避難所を出る方々が多数いました。避難所の人数も減ってきたため，以前あった会話の声も聞こえることなく，静かな時間帯がありました。（省略）
	3回目	（省略）日中は気温も上がりすごく暑くなっていて，暑さ対策をしていかないと熱中症などになってしまうので，水分を細目にとるようにしました。
	5回目	避難所の閉鎖も間近ということもあり，体育館は人が少ししかいなく，とても静かでした。（省略）
F	3回目	（省略）今の先の見えない被災者の人たちと触れ合い，本当に悲しい現実でも精一杯生きようとする気持ちがすごく伝わってきた。（省略）疲れを見せる人もいた。
	4回目	（省略）他の避難所は仕切りがあるけれど，ここの避難所にはない。避難所によって，プライベートを隠したかったり，個人個人が孤立することを嫌がったり，これは地域によって違うのかなと感じた。（省略）
G	3回目	（省略）その中で気になった点が，「食事がワンパターン化してきて飽きた」ということでした。炊き出しする人も減ってきた点や，賞味期限の関係で同じ物ばかりなどの原因が考えられました。私たちに何ができるかを深く考えさせられました。

表8.　他の支援団体との協同・連携

学生	回数	記録（感想）内容
B	4回目	今日は午後から子どもたちと野球をやりました。他大学のボランティアの方々とチームをわけて本格的な試合をやりました。（省略）また，炊き出しにHからボランティアの方々がきてすごいなと感心しました。
	5回目	（省略）K県からきていた美術関係のボランティアの方々と子どもたちとで3mの画用紙に色々な絵を描きました。（省略）
	6回目	今日は支援物資の仕分けをしました。途中，他大学のボランティアも一緒に手伝ってくれ，半分くらいの仕分けをやりました。（省略）
E	5回目	（省略）自衛隊の音楽会では，楽器での演奏で演歌などもやっていたので，すごく嬉しそうでした。私たちの笑顔で元気にできるようにしていきたいと思いました。

表9.　自分の活動に対する期待や課題

学生	回数	記録（感想）内容
A	3回目	（省略）関わりに偏りが出てしまい，まだ関わりのない方とも関わっていきたと思う。（省略）コミュニケーションを大切にしていきたいと思う。

A	8 回目	（省略）高齢者の方や子どもたちと関わる時間があまり取ることが出来なかったので，自分自身での時間の配分を考えていく必要があったのでないかと思う。避難者の方から「また来たの」と声をかけていただき,「また話しをしようね」「行きますね」と言ったが，他の作業が忙しく，行くことが出来なかった。（省略）
	9 回目	（省略）子どもたちから（省略）何かあると私の名前を呼んでくれて，今まで関わってきたなかで，信頼関係が築いてくることができた（省略）高齢者の方からも「今日も来たか」などと声をかけていただき，互いにふざけあうなど，信頼関係を築くことができたと感じた。子どもたちの会話で,「震災がなかったら，出会えなかったんだよ」と言っているのを聞いて嬉しくなった。（省略）その一つひとつの出会いに感謝しないといけないと思った。
C	6 回目	１日も早く，もとの生活ができるようになることが一番の望みですが，それまでの間に不安や心の揺れは続くと思います。少しでも話し相手や体や心のケアにお手伝いができるのであれば，支援を続けていきたいと思います。何よりも話しかけたときに，笑顔になってくれたことが嬉しかったです。活動に入ることで「どっかで見た顔だな」と覚えて下さる避難所の方の一言で，互いに安心感を得ることができました。
	7 回目	明日のことはわかりませんが，いつ何時でも自然災害はお構いなしに来て，人間を襲いかかります。まさか，このような体験をするとは思いませんでした。不安はまだ消えませんが，未曽有の災害に合われた方々の苦しみは計り知れないものだと感じました。被災地を訪れ, ボランティアを通して感じました。このことをいつも忘れずに, 今，何をすればいいのか，何ができるのかを考えながら過ごしていきたいです。
D	7 回目	今日でボランティア活動は最後でした。ここでの活動を通して，避難所にいる方との交流をするにあたって，普通のボランティアなどでは経験できない貴重な時間を過ごしたと思います。このボランティアで学んだこと，一生忘れることなく，次ぎに行くボランティア先で生かしていきたいです。
E	2 回目	マッサージを頼まれ，普通にやっていたら，専門の知識を持っている人に「やるな」と言われた。頼まれるし, どうしていいかわからなかった。楽しかったけど, ボランティアは難しいものだなと思いました。
	6 回目	（省略）高齢者の方から「今日は来てくれないの」と言われたときは，本当に焦りました。（省略）継続的に行くことで会話に困ることもしばしばありました。ニーズの変化など，少しですが感じとれたように気がします。（省略）
F	2 回目	（省略）もっと一緒に遊んであげたい，たくさん我慢して，たくさん心は泣いているから，もっと楽しいことを教えてあげたい。
	5 回目	（省略）避難所の方々が，違うボランティアが来ると，毎回，同じような話をすることになり疲れるとおっしゃっていた。癒しに行っているのに疲れると言われてしまうのは，意味がないのではないかと感じた。
G	4 回目	（省略）高齢の方から足腰や悪く移動するのが大変ということで，外に新たにできた冷房の効いたプレハブへの移動も困難だということを聞きました。（省略）暑さを和らげる良い方法が何かないか考える 1 日となりました。
	5 回目	（省略）行く度，行く度に必要とされる支援が違い，求められる支援に応えられないときもありました。しかし，避難所の方と触れ合うにつれ，私たちを楽しみにしていたことを知ったときは本当に嬉しく，次ぎも頑張ろうという気持ちになれました。